



【神の御心に相応しい働き人】

聖書本文：マタイの福音書 20章 1-16節・暗唱聖句：ガラテヤ人への手紙 6章 2節

説教者：鄭南哲牧師

(Rev. Jung nam-chul)

<1. 神の国のため働き人を探しておられる神様>

この世には我々がやるべき仕事がたくさんあります。国家的にも、社会的にも重要な事が山積みあるでしょう。なので社会ではいつも有能な働き人を探しています。神の御国や主の教会においてもやるべき働きや多くの奉仕があります。何よりもキリストの福音を伝え、罪の中にいる人々を救いつつ、主の教会をますます力強く立てられて行くために、伝道と宣教、教育、交わりのために働き人が必要とされています。教会だけではなく、我々が住んでいる町々で、この社会においても神の正義と愛が川のように流されていくために各分野で働けるクリスチャンリーダーたちが必要とされています。

本文1節は神の国についてのイエス様の教えですが、働き人(労働者)を探しに出かけたぶどう園の主人の気持ちがよく表されています。つまり、神の国の大事な働きのために働き人を探している主人の御心をぶどう園の働き人を探すために出かける主人の姿を通してよく知る事ができます。イエス様の時代も、今日もイスラエルでは9月末ごろになると、ぶどうを収穫しますが、その後、もうすぐ雨期(うき)が近づきますから急いで収穫をしていました。そのため、ぶどうの収穫の時はいつも人手(ひと)が足りなかったのです。そのため、ぶどうの主人たちは市場に 行って働く人を探しました。一時間でも働ける人がいるなら、喜んで雇いました。

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん、今日我々が生きている時代も今日の本文のぶどう園と似ているのではないのでしょうか。聖書によると、我々は最後の収穫の時代に生きていると教えて下さっています。ヨハネの福音書4章35節でイエス様は“さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。”と言われました。

今の時代は福音を聞いた事がない人々が歴史上一番多い時代になっています。全世界の70億の人口の中40億以上の人々は生まれてから死ぬ時まで一度もイエスキリストの福音を聞いた事がないようです。彼らには何の選択肢もなく放置されたまま、本当の救いの道がある事さえ分からず、永遠の死に向かっている人々がどれほど多いのか分かりません。

“神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネの福音書3章16節)”

尊い一人の魂も滅んでほしくない天の父なる神様の御心はどうでしょうか。そして福音を聞いてもまだ聖霊様を経験してない人たちも少ないし、数も少ない主の教会が力強く立てられて行くためにはさらに主の働き人たちが必要とされている時期でもあります。主イエスキリストは今収穫の時期として農夫の切なる心をもって働き人を呼んでくださっています。

“そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(ルカの福音書10章2節)

<今日の聖書の本文>

今日の本文に戻りますと、ぶどう園の主人は朝早く出かけて一日一デナリの日当(にっとう)約束し、働き人たちをぶどう園に入れました。そして、3時(朝9時ごろ)、6時(正午12時)と、9時(午後3時)にも市場で何もしないでうろろしながら遊んでいた人々を受け入れ、ぶどう園で働かせました。

6節を見ると、主人はまた午後5時ごろ、市場に出かけました。行ったら、もう日が沈んで一日が終わろうとしていてもまだ一日中ずっと何もせずにぶらぶらしていた人たちがいました。主人が彼らに問いました。

“また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』”(6-7節)

すばらしい出来事ではないでしょうか。大体一時間残ってないのにも関わらず主人は働き人たちを招いて下さっているのです。ここでも主人の哀れみの心、恵みの心を知ることができます。もう一日が終わって、一日の日課(にっか)が終わりました。問題はここから起こります。日が沈む6時ごろ、ろくに動かせないほど疲れた体でしたが、働き人たちは主人の監督から日当をもらえる事に嬉しく集まって来ましたが、そこで思わぬ不平不満の声が聞こえて来ます。

8節によると、最後に来た者から、最初に来た者たちにまで、賃金をもらいましたが、最後の5時に来た者も、朝9時から来て一日働いた者もみんな同じ一人一デナリずつであった事で主人に向かって文句を言い張ったわけです。

最初市場で呼ばれて仕事を始めた時の感謝も、喜びも消えて、ただ主人や他の働き人たちに対してこき下ろす事になってしまった理由は何でしたか。それに対して、つぶやきながら恨んでいる彼らを叱りながら、16節に主人はこう言われました。

“このように、あとの者が先になり、先の者が後になるものです。”と言われた主のお言葉の意味は何でしょうか。

<今日の本文の背景>

今日の本文をもっと正しく知るためにはその背景を知る必要があります。マタイの福音書19章27-30節です。ある日、イエス様の一番の弟子であるペテロがイエス様に来てとっても率直な質問をします。27節をみてください。

“そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何かいただけるのでしょうか。」

ペテロはイエス様を信じて従いながら、見えない永遠の命への約束だけでは満足できませんでした。彼の生き方や価値観、世界観、人生の方向が変わるだけでは満足できませんでした。つまり、ペテロは肌(はだ)で感じるほどの計算上のプラスがほしかったのです。今まで主のためにGive頑張っただけでここまで来たなら、具体的な主からのTake、報いがなければならなかったのです。

愛するみなさん！今日例え、日曜日に時間をささげ、お金をささげ、体をささげ奉仕し、働いたのだから、何か神様からのすぐ見える祝福の結果としてかならず、むくわれるべきではないかという考えと同じです。たとえば、今まで主のため仕えて来た結果、子どもが望んでいた受験の学校に降格するか、株式が急に上がるのか、くじでもあたるべきではないか。これがまさに人間としての報償発想、取引意識ではないでしょうか。

当時、ペテロは誰よりも熱心にイエス様の弟子として頑張りましたが、このような報償意識に陥られた瞬間、信仰の危機に招いてしまいました。そのように考え始める瞬間、なんとなく自分がすべて今まで損して来ていると感じ始めたわけです。つまり信仰の危機が訪れました。その時、イエス様は何とおっしゃいましたか。マタイの福音書19章29節にはかならず、幾倍(いくばい)も報われる事とまた永遠のいのちを受け継ぐと約束されました。

“また、わたしの名のために家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。”しかし、30節に“ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。”教えながら主はこのような人たちはもう後の者になるしかない、つまり、もうそのような人たちは神のためには用いられる事はないということをも言われました。

そして、イエス様はそこで終わるのではなく、ペテロや弟子たちも含め、主の者たちが後にならず、さらに神の相応しい働き人として歩めるように次のぶどう園の働き人のたとえ話を語って下さったわけです。

今日我々はこのお話を通して主の教会での奉仕者や働き人がどんな心構えと姿勢で働き、仕えるべきであるか学ばなければなりません。そして、弱くて足りない我々を呼んで下さって神の国の働きをさせて下さった主に、そして最後の日に働いた者たちにならず報いて下さる主の恵みにもう一度感謝する時間となりますように祈ります。

愛するみなさん、ぶどう園の主人の心に合わせた相応しい働き人の姿は何だと思えますか。主の体である教会での奉仕者、働き人としてどんな姿勢を取るべきでしょうか。

<2.神の御心に相応しい働き人になるためには >

1. 比較意識を捨てなければなりません。

“最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。”(10節)

“そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて(11節)”

“言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかつたのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱(しんぼう)したのです。』”(12節)”

働いた人たちの中で今主人に文句を言っている人々はだれですか。10節によると、“最初に来た者たち”でした。

一番最初に朝9時から来て一日中ずっと暑さに耐えながら、疲れながら働いていた働き人たちでした。

11節で“文句をつけて”の原語は未完了形(みかんりょうけい)“謗(そし)り続けている、”“ひそひそとつぶやき続けている”という意味であります。これが未完了形で使われたということは主人に対して何度も繰り返してつぶやいたという事を表しています。この単語はイスラエルの民が出エジプトしてから荒野で難関にぶつかった時、モーセと神様に対抗してつぶやいた時、使われた単語と同じ意味です(出エジプト15:24, 16:7,8)。彼らは一日中労苦した事を主人が気づいてくれないのだと思いました。ここで“労苦”は病気などで“押さえつける苦痛”を言う時使う単語です。自分たちは一日中息苦しいほどの苦痛を耐えながら働いたのにそれに対する代価は少ないと思ったのです。当然、後で来た人たちが一デナリをもらったのであれば、自分たちは“もっともらえるだろう”と思い込んでいたからでしょう。

ここで最初来て働いた彼らの心には後で来てた人をじっと見つめながら比較していたため、自分たちを呼んでくれた主人への感謝と恵みをすっかり忘れてしまいました。どんな意味ですか?主からほめられる働き人となるためにはまず自分の中にある比較意識を捨てなければなりません。人を見ながら働くとき必ず比較しながら、優越意識、自己功労意識かあるいは被害意識に陥りやすいので、いつも我々の主であられるイエスキリストのみに、イエスキリストのためというフォーカスを合わせて置かなければならない事をここで教えられるのではないのでしょうか。

愛する信仰の家族のみなさん!たしかに、他人と比較する時、主への感謝はなくなっていきます。事実、働き人は主人と一デナリの賃金を約束されて、約束の通り、主人から一デナリをもらったので、彼らがつぶやく理由は無いはずです。

主人の話を聞いてみてください(13節)

“しかし、彼はそのひとりに答えて言った。「友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。」”(13節)

我々もよく働きながら、奉仕をしながら、ただただ神の恵みに感謝ばかりの心で始めますが、後でほかの人と比較してしまう時がよくあるのではないのでしょうか。特に周りの人々がよく頑張っている自分より認められ、自分より優れたと思う時、あるいは、自分の信仰の熱心さより信仰もよくなさそうに見えるのに大事にされたり、重要な役割が任されると自分とよく比較してしまいます。当然、教会においても起こりやすい現象です。“あの人にはあんなに恵みをくださったのに、なぜ私にはくたさらないのか?”“あの人はまいちなのに教会であんなに大切な奉仕や働きが任されるのは不公平すぎだ。”など。。。

他の兄弟姉妹がもっと神の恵みを受けるのを願うのはどうでしょうか。他の信徒さんがもっと祝福されるようにと祈るのはどうでしょうか。そして彼らと喜んで協力すべきではないのでしょうか。自分に与えられた一デナリに満足しながら、後に来た人々も同じく一デナリをもらえる事を心から喜んであげることはどうでしょうか。ぶどう園の主人なる我々の神様はこのような働き人を愛し、かならずさらに多く報いて下さると信じます。

我々はこのような比較意識をどうやって捨てて、それを克服できるのでしょうか。比較意識の聖書的処方方は創造信仰を持つ事であることが分かります。神様が我々を創造されたとき一人も同じように造られなかった事です。顔も違い、個性も違い、気質も違い、

賜物も違い、ですから、人生の行く道も、神様からの各使命も当然同じではないことです。それぞれ自分だけの独特(どくとく)の使命(しめい)があるということです。

ですから、自分の使命を見つけ、自分らしくもくもくと生きればいいのです。かならず、となりの人と同じく生きる理由はないのです。それぞれ自分の色で人生を過ごすということこそすばらしいであって、それが調和をたもったとき、さらにうつくしいことではありませんか。現代人の不幸はしきりに画一化(かくいつか)させようとしています。ぐれぐれもほかの人があなたと違って生きる自由を与えてください。あなたのやり方を他の人々に強制しないで下さい。まねしようとししないでください。そうなると、比較することも嫉妬することもなくなるでしょう。

神様があなたにのみに許された今の人生を受け入れ感謝し楽しんでください。そして、みなさんと違った隣人がみなさんのとなりにいることを悩まないでむしろ感謝してください。他の人たちを先に立たせ、自分がうしろになろうとすると自分は神様の御前で、主の共同体の中で、我々の人生において、自分の領域(りょういき)において却ってさきになった者として生きて行けると信じます。しかし、そうでなく比較意識の奴隷となるとその瞬間からすでに我々は後になった者の道を歩むことになると思って下さい。

2. 同労者(どうろうしゃ)信仰を持たなければなりません。

ぶどう園に朝から来て働いた人々には同労意識がありませんでした。自分たちがどれぐらいもらったのかだけに関心があって、毎日同じ働きをしながら日当を受けないと生活をできない同じ苦勞する立場、同じ大変な状況や身分を考える一緒に働く者に対する同僚意識がまったくありませんでした。彼らが主人に文句をつけた理由はここにありました。彼らには同労者意識より競争者意識があったからです。こんにちも同じです。我々の社会はお互い助け合う同労者、共存(きょうそん)する意識よりは競争意識がもっと強いし、そこで勝つか、負けるかがまるで人を評価する価値基準見たいに、上に立った者たちのみが成功し、幸せな者みたいになっているのではないかと思います。

しかし、教会ではこの世と違って競争より同労者信仰と意識がもっと強くなって行かなければなりません。競争するよりむしろ協力し、助け合わなければなりません。ぶどう園に早くから来て働いた人々が後で来た人々を同僚、同労者として考えたならば、文句は言わなかったと思います。ところが、13節で主人が文句を言っている人々に“友よ”と呼んだことを注目して下さい。これは“同僚”(companion)という意味もありますが、もっと深い意味として“戦場での友”(fellow-soldier)を言う時も使う言葉です。つまり、同じ目的をもって運命を一緒にする者という意味です。ですから、信徒の間に同労意識が強い時そこ、その教会はかならずさらに和睦な教会となれると信じます。

みなさんもよくご存知のイソップ童話の話の中で、ある主人に一頭の馬とろばがいました。ある日、旅立っている道中馬とろばは主人の荷物を背中に背負って旅立ちました。一日中歩いて夜遅くやどやに着いて、翌日の朝早く旅を始める苦しい何日かが続きました。ある日体が弱いロバが限界を感じ馬にお願いします。“馬さん。私をちょっと助けてちょうだい。このままだともう死んでしまいそう。なので、私の荷物をすこし持ってほしいけど是非お願いっ！”ロバは息苦しうに馬に哀願(あいがん)しました。すると馬は冷たく即座(そくざ)に断ります。“ダメ。おれも死にそうなんだから。おまえの荷物まで背負うなんて、もう無理だよ。”

ロバはそれ以上頼むことができず、結局倒れて死んでしまいました。すると主人は早速ロバが背負っていたすべての荷物を馬の背中に全部背負わせました。それだけじゃなく馬はなくなったロバまでも背負って行かなきゃなりません。結局馬はもっと重い荷物を持たせることになってしまう事になってから後悔したという話です。

愛する信仰の家族のみなさん! もしロバが大変でお願いした時、少しも助けたなら、どうなったと思いますか。結果的に、馬は主人にロバを失わせ、自分もさらに重い荷物を背負わせることになってしまいました。このように馬のような信徒たちや教会にならないように気を付けましょう。いつも教会の働きを少数の人々だけがあまりにもたくさんの働きをするため疲れ果ててしまう信徒たちを見られないように共に努力しましょう。お互いに助け合うとすぐ終わることを助け合わないため、何人かだけがいつも苦勞する場合があります。これを当然任された人たちだけがやるべきだと思ってはいけません。

偉大な使徒パウロにはテモテとルカとシラスとアリスダゴのようなすばらしい同労者たちがいました(ローマ16:3,9,21、第一コリント3:9、第二コリント8:23、ピリピ4:3、ピレモン1:1、24)。パウロは自分の同労者であるプリスカとアクラに対して“この人たちは、自分のいのちの危険を冒(おか)して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。(ローマ16:4)”

愛する信仰の家族のみなさん パウロのような偉大な伝道者にも同労者が必要でした。彼にこのような同労者がいなかったなら神の働きを偉大に全うすることはできなかったはずです。

使徒パウロの手が届かないところで同労者である彼らは主の働きを全うしました。パウロが大変な時、大きな励ましと慰めの手となりました。自分のいのちの危険を冒してでも神の働きのため、主の教会のためにパウロを助け、共に働きました。神様は我々にただの会社の同僚の程度でなく、兄弟姉妹のためなら、自分のいのちさえも惜しまずにささげる事ができるほどの同労者意識と信仰を持つようにと望んでおられます。

ぶどう園に先に来て働いた人は後に来た働き人と主人の働きをともにするという同労意識はありませんでした。しかし、教会の働き人たちは何よりもこの同労者信仰と意識の強い人になりましょう。周りの兄弟姉妹たちとともに主の教会を立て上げていくことを共に喜ぶ、共に助け合って共に神の栄光のため働く人たちになりますように切に祈ります。

3. 負い目の信仰と心を持たなければなりません。

主に喜ばされる働き人は恵みによって我々を救ってくださった主に負い目を持っている人です。ぶどう園に早くから来て働いた人々は自分たちがゲデナリを約束され、働いた者たちでした。しかし、彼らは働いた後、賃金をもらってから市場で遊んでいた自分たちを呼んでくださった主人への感謝を失ってしまいました。彼らはもともとどんな人たちでしたか。彼らはもともと自分たちの状況を

失っていた事が本当の問題の始まりでした。朝9時から来た人たちも、12時に来た人たちも、最後に5時に来た人たちの同じ共通点がありました。何でしたか。3節を見ると、“それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。”6節の後半を読んでみると、“彼らに言った。「なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。」”どんな単語がくりかえされていますか。“何もしないで”です。

彼らは主人の声を覚えなければなりません。“「なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。」彼らは言った。「だれも雇ってくれないからです。」彼は言った。「あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。」(6節)”

つまり、彼らは先に呼ばれたか、後で呼ばれたのか関係なく、主人が呼んで下さる前まではみんな何もやらないで人生を浪費しながら、正しい方向なく、うろろしながら意味のない人生を過ごしていたわけです。これはどんな意味でしょうか。

イエスキリストは罪の中で自分の力では救われず、人生の真の生きる意味も、方向も知らず、さまよっていた人々を救い出してくださいました。彼らからではなく、一方的な主の恵みのゆえに神様が我々を選び、呼んで、救ってくださいました。これがまさに恵みではありませんか。罪赦され、救われただけでも、感謝なのに、さらに働き人として受け入れてくださいました。

これもまた一方的な恵みではないでしょうか。そうです。ところが、自分に与えて下さった計り知れない神の恵みと信仰を失ってしまう時、残ったのはまるで取引意識見たいな事にとらわれてしまいがちです。今まで自分がどれほど苦労しながら、頑張っ、熱心に働いたのか他の人たちと比較しながら、自分の功劳意識しか残らなくなってしまいます。まさに、その瞬間から先になった者が後になる者への危機に落ちってしまうケースです。

早くから来て、後で来た人たちよりもっと苦労したと言って人々は主人への負い目も忘れてしまいました。ですから、彼らは主人に文句をつけたのです。みなさん! 我々はキリストの大きい愛を受けました。イエス・キリストの血潮により、罪赦され神様の子どもとされました。受け入れられただけではなく、神の国、教会、栄光のために用いられている主の働き人や奉仕者になられたことがどれほどの祝福なのでしょう。いくら我々が熱心に努力し、仕えても我々の罪を赦し、永遠に滅びる我々を救うために十字架で血を流したイエスキリストの恵みと救い、用いて下さる主の愛の恩返すことができるでしょうか。

今まで教会で主の働きをしたと自分で立たせることはできるでしょうか“自分はこんなにやったのにだれも認めてくれないなんて”という思いがあるなら、それはまだ我々に主への負い目の信仰と意識がないからだと思います。我々が教会のために一生懸命に働いたとはいえそれに要求する権利なんかは我々にはありません。

“しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。(ルカ17:9)”

偉大な使徒と呼ばれたパウロは一生自己功劳感に捕らわれないように言動に慎みながら負い目ある人生である事を主と人々の前で忘れないよう必死だったように見えます。ローマ人への手紙1章14節で、“私は、ギリシャ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならぬ負債を負っています。”と告白しています。

ある記録によると、我々の以前の信仰の先輩たちは祈るたびに最後に“主の御前で何の功劳のないこの罪人が恐れ多く主イエスの御名によってお祈りします。”もしくは“ただ、イエス様の功劳によってお祈り致します。”と祈られたそうです。

神様のために殉教されたある聖者が天国の前でキリストの審判台に立っている信徒たちの一番後ろで頭を下げていました。みんな勲章(くんしょう)のように自分のよくやった事をかけて来ている中で、彼だけは違います。“あなたは何をしたのか”と問われる主に彼は答えました。“主よ! 主のためによくやったことは何一つ思い出せません。”我々は神様に計り知れない負い目をもっている者たちです。負い目のある者たちが主のために働いたとて何か大きな功劳を立てたのようには勘違いしてはいけたいと思います。

トルコのイズミルというところは聖書に出てくる小アジアのスミルナという所でした。そこに行くとかならず、行ってみたいところがありますが、それはポリカプの記念教会です。使徒ヨハネの弟子として初代教会のスミルナ教会を牧会していたポリカプはユダヤ人たちの通報によって逮捕されました。イエスの御名さえ否定すれば釈放してあげるという総督の前でポリカプは教会の歴史において有名なこの話を残します。“私は86年間もイエス様を信じてきました。その方は一度も私を裏切り、害を与えた事がないのに、私がどうして私の王を否定できるでしょうか。”結局、彼は火刑(かけい)が言い渡され、火が燃え上がってきている時でした。ポリカプは落ちてこう言いました。“みなさん。もう準備はできましたか。するとこれから私を燃やしてください。私がどうしてしばらく焼けて消える火を恐れるでしょう。”そしてこのように最後の祈りをささげます。

“おお、主よ。このように殉教者の列に入れてくださるなんてなんという恵みでしょうか。私を一生受け入れてくださり、救ってくださいました主よ。感謝します。あの御国でも私も受け入れて下さい。”

クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん!ぶどう園の主人に喜ばれる働き人の姿は何でしょうか。主の御体なる教会の働き人はどんな心構えであるべきでしょうか。まずは、比較意識を捨てなければなりません。次は、同労者意識を持たなければなりません。三つ目は一生計り知れない神の恵みと愛に対する負い目のある者の信仰と姿勢を忘れないことです。

主の御心にかなう働き人は自分が受けた恵みに満足する人です。いつも感謝することを忘れず捧げあわす者です。ぐれぐれも主のために働く時、仕える時、他人と比較しないで下さい。比較する心から不平はすぐに出やすいからです。心を尽くして、ともに働く周りの信徒たちと同労者の信仰と創造信仰をしっかり持ちましょう。“互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。(ガラテヤ6:2)”そして、神様の愛と恵みの負い目をもっている信仰の人としてその意識をもって教会生活をする時こそ、主の教会は主に喜ばれ、未信者から認められ、ほめられると信じます。

今年も、神の国のぶどう園の働き人として、任された神の働きを全うすることにより、主にほめられる忠実な神様のしもべらとなりますようクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!